

パートナー会社との連携で目指す 「地域活性化の実践と人材育成」

所属:阿南支局

氏名:鈴江省吾

■地域紹介

徳島県阿南市は四国最東端にあり、温暖な風土で海の幸（ハモ、アワビ、ワカメ）、山の幸（たけのこ、すだち）とも豊かです。一方で、海運の利を活かして製紙工場や火力発電所が立地し、近年では青色発光ダイオード実用化で急成長した日亜化学工業株式会社が市の産業経済を支えています。人口は約7万6千人、徳島県では2番目ですが、周辺自治体は人口減少が著しく、阿南市は中核都市として県南地域を支える役割も担っています。

平成25年には、首都圏とのつながりを強化するため東京事務所を市単独で設置し、国への要望、阿南市出身者との交流、移住促進、地域資源のプロモーション活動を積極的に行っていました。そうしたことから大正大学との縁が生まれ、平成27年には自治体連携くろしおコンソーシアムの呼びかけ人として大学と包括協定を締結しました。以降、阿南市の未来を創造する「あなん未来会議」の企画運営を大学が行い、平成28年度から地域創生学部学生の地域実習も受け入れています。

そして、この連携をさらに拡充して効果的に実践するため、平成29年6月、JR阿南駅前に大正大学地域構想研究所阿南支局が開設されました。支局は、同時に創業した大正大学地域創生ソリューションパートナー株式会社すだっち阿南の事務所「Sudatch」の2階にあり、職員が常駐して、阿南市との連絡調整、未来会議の調査研究事業、情報誌「地域人」への情報提供、市内高校との交流、大学のPR活動を行っています。事務所では、大学の各種パンフレットをはじめ、実習を紹介する写真や地域資源MAPなどを展示しており、地域実習中はテレビ会議やミーティング会場として学生たちの学びの拠点となりました。

■今後の活動方針

この2年間、株式会社すだっち阿南とも連携して、学生の実習をはじめ、地域イベントへの参画、特産品のPR、まちゼミなど、地域創生につながる街の活性化に積極的に取り組んだことにより、支局に対する市民の認知度も高まってまいりました。次年度も引き続き、阿南市及び周辺自治体、徳島県ともさらに連携を深めながら、地域構想研究所の専門的な知見を基に活動の幅を広げていきたいと思えます。

具体的な重点目標としては、①「支局だより」として地域構想研究所HPや情報誌「地域人」に地域の取り組みや話題を提供、②すだっち阿南が開設した地域情報WEBサイト「まけまけ阿南」を活用した大学のPR、③高校生ミライ会議などを通じた市内高校との連携拡大、④大正大学卒業生及び市内若者の起業等を支援する仕組みづくりの検討、⑤自治体のニーズに応じた専門講師派遣の企画提案、⑥「大正大学あさ市」等での地域産物PR及び販売の継続、⑦JR阿南駅前のアンテナショップの検証、⑧新野地域のまちづくり支援プロジェクト構想の検証、をあげたいと思えます。

また、女性の新しい働き方を推進するNPO団体、商工会議所青年部、地域おこし協力隊、新野町ワイ

ワイ塾、平等寺、市内企業で発足した観光事業プロジェクト会議、富岡西高校等との協働についても、アイデアを膨らませたいと考えています。例えば、かつて阿南市は那賀川流域の良質の杉を使って、鏡台やタンスなどを作る家具工場がたくさんありました。今では衰退して数社となりましたが、商工会議所青年部会員の家具製造会社では、シニア向けの椅子や収納箱、藍染をあしらったカバンの販売などの新規商品の開発を積極的に行っています。今後、この製品を巣鴨商店街に持ち込んで、おじいちゃんおばあちゃんに実際に座ったり触ったりしてもらって、座り心地や利便性について聞き取りを行うなど、マーケティング調査を学生たちと企業がタイアップして行うことができれば、地域資源の新たな創造につながるかもしれません。

■地域との連携・関係づくり活動実績

「あなん未来会議」の一つとして、昨年11月23日、第2回目となる「高校生ミライ会議」が阿南市役所で開催されました。集まったのは市内5校の高校生17名、先輩ゲスト4名、未来会議委員3名で、ファシリテーターは大正大学地域構想研究所専任講師の山中昌幸先生が務めました。今回のテーマは「阿南のミライ×自分のミライ」。Uターンして地元で働く先輩とのグループ討議を通して、住みたい町の理想像と自分の将来を重ね合わせてキャリアビジョンを絵に描こうというものです。「フランスで修業して地元でレストランを開業した」、「東京でのIT企業から地元企業に再就職、子供にかっこいいと言われるエンジニアになりたい」といった先輩達の体験とともに、地元富岡西高校出身で本大学地域創生学部の中野さんも実習や学生生活の様子を語りかけました。高校生たちは年齢も近い先輩たちの話を食い入るように聴いて、「先輩の話が聞けて本当によかった」、「将来を具体的に考えられた」、「このような機会を増やしてほしい」などの嬉しい声が聞かれ、支局としてもやりがいを感じる1日でした。

